

せいしそう 製糸業のはじまり

製糸とは蚕の作ったまゆ（蚕繭）から絹糸（生糸）を作ることです。

日本では主に衣服を古代・中世には絹と麻、近世になると麻にかわって木綿で作られてきました。絹の生産は江戸時代まで、手作業で行なわれていましたが、1854年頃（安政年間）に器械による製糸が始まったとされています。江戸時代は土地は幕府のもので水田・畠は個人所有ではありませんでしたが、1871年（明治4年）政府は桑等の作付を自由にしました。また1873年（明治6年）には地租改正条例を行い、租税を金納としたため養蚕がさかんになりました。

なぜ養蚕がさかんになったのか？

生糸がアメリカに輸出されるようになると、水田で米を作っているより一反歩（10アール＝1000m²）約1.5倍の収入になったようです。

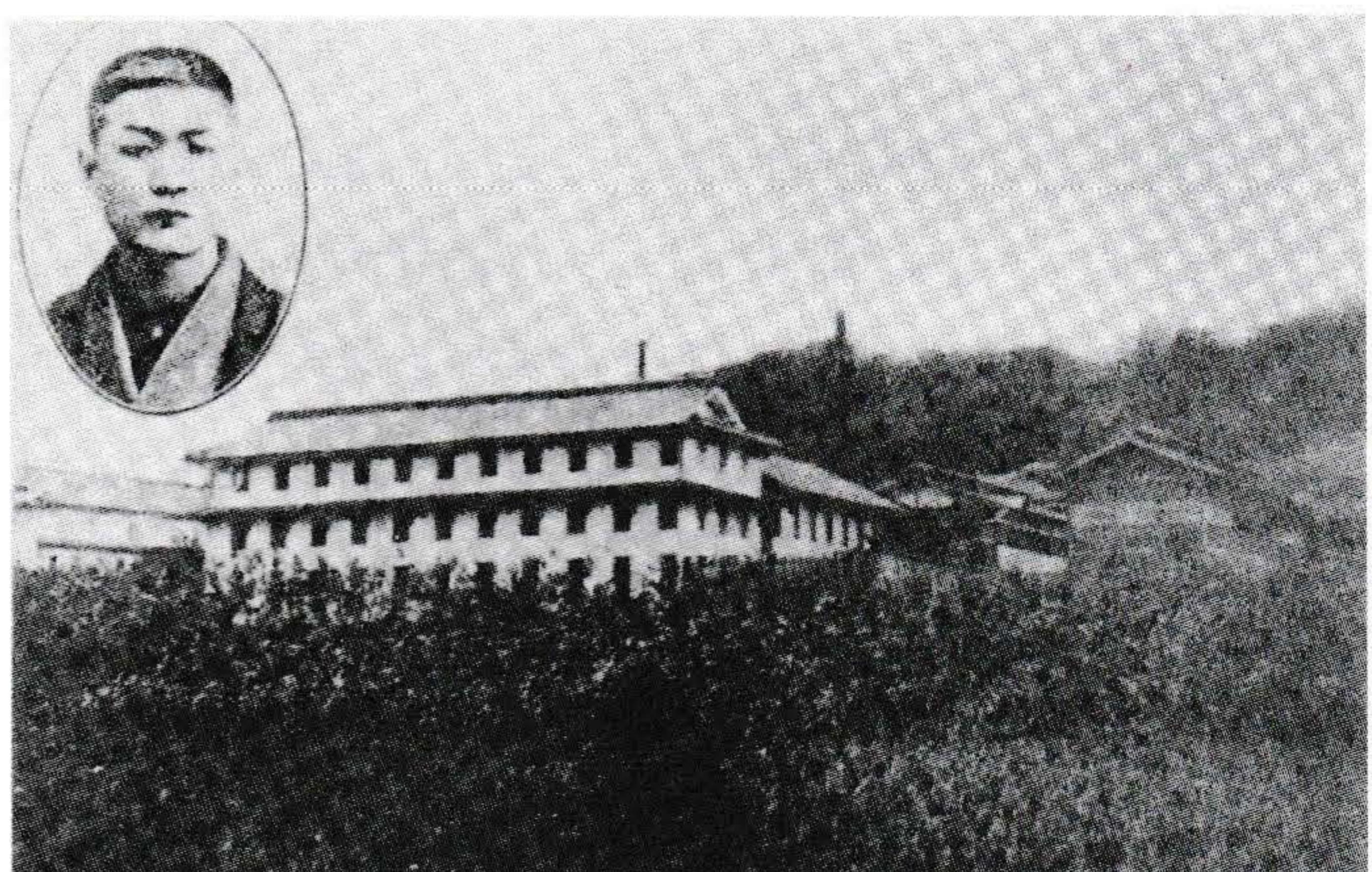
座光寺の製糸はいつごろから？

1877年（明治10年）に小寺子製糸場（南信社）が、次いで1881年（明治14年）には今村製糸場が創業しました。明治20年～28年頃は、日の丸（小島）・古瀬・北原（共同）・寺地・吉川・田畠・三村製糸場というそれぞれ個人製糸が創業されたり廃業したりしています。明治末頃湯沢（座光寺館）・牧野製糸・国光社が創業し、大正時代中頃には5～6軒が安定した操業を続けていたようです。下伊那全体では約60工場、従業者は約5,700人いましたが、座光寺は510人位で全体の約9%を占めていたようです。1915年（大正4年）には「有限責任座光寺生糸販売組合」（共信社）が設立され個人経営から協同組合へと変わっていきました。1921年（大正10年）には、13の製糸場がありピークでした。そんななか大正10年頃から始まった生糸相場の暴落等により、以後倒産する製糸場が多くなり、1925年（大正14年）には、共信社・国光社・座光寺館になり、1926年（昭和初年）には共信社だけになって個人経営の製糸場は廃業倒産してしまいました。1937年（昭和12年）下伊那全体で組合製糸（天龍社）が発足して共信社も合併し、座光寺からは製糸場はなくなりました。

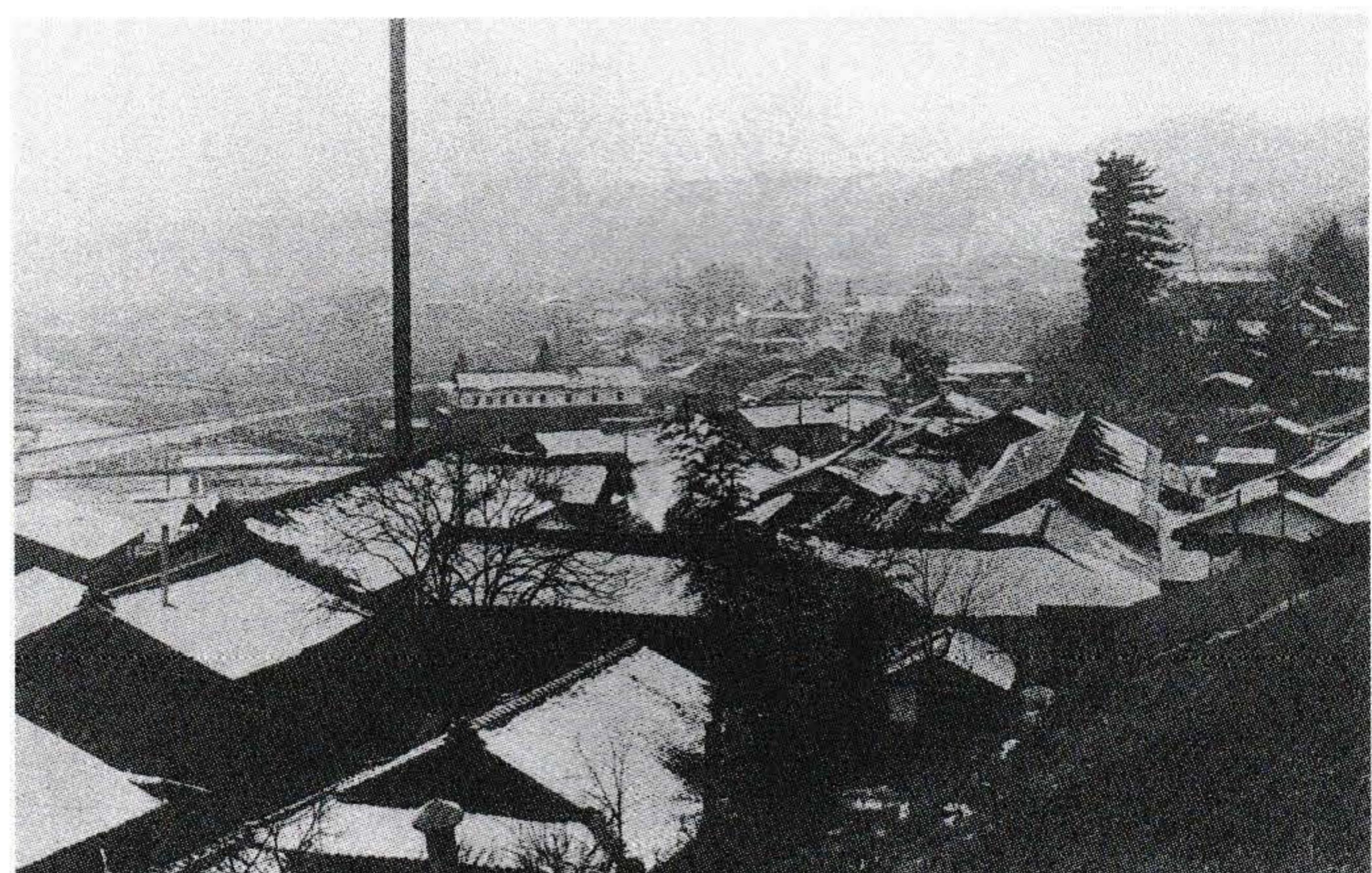
1931年（昭和6年）座光寺の桑園面積は226.4町歩（ヘクタール）で、水田95.2町歩の約2.4倍の桑園でした。

1997年（平成9年）に天龍社が解散して約130年続いた製糸業が終りました。

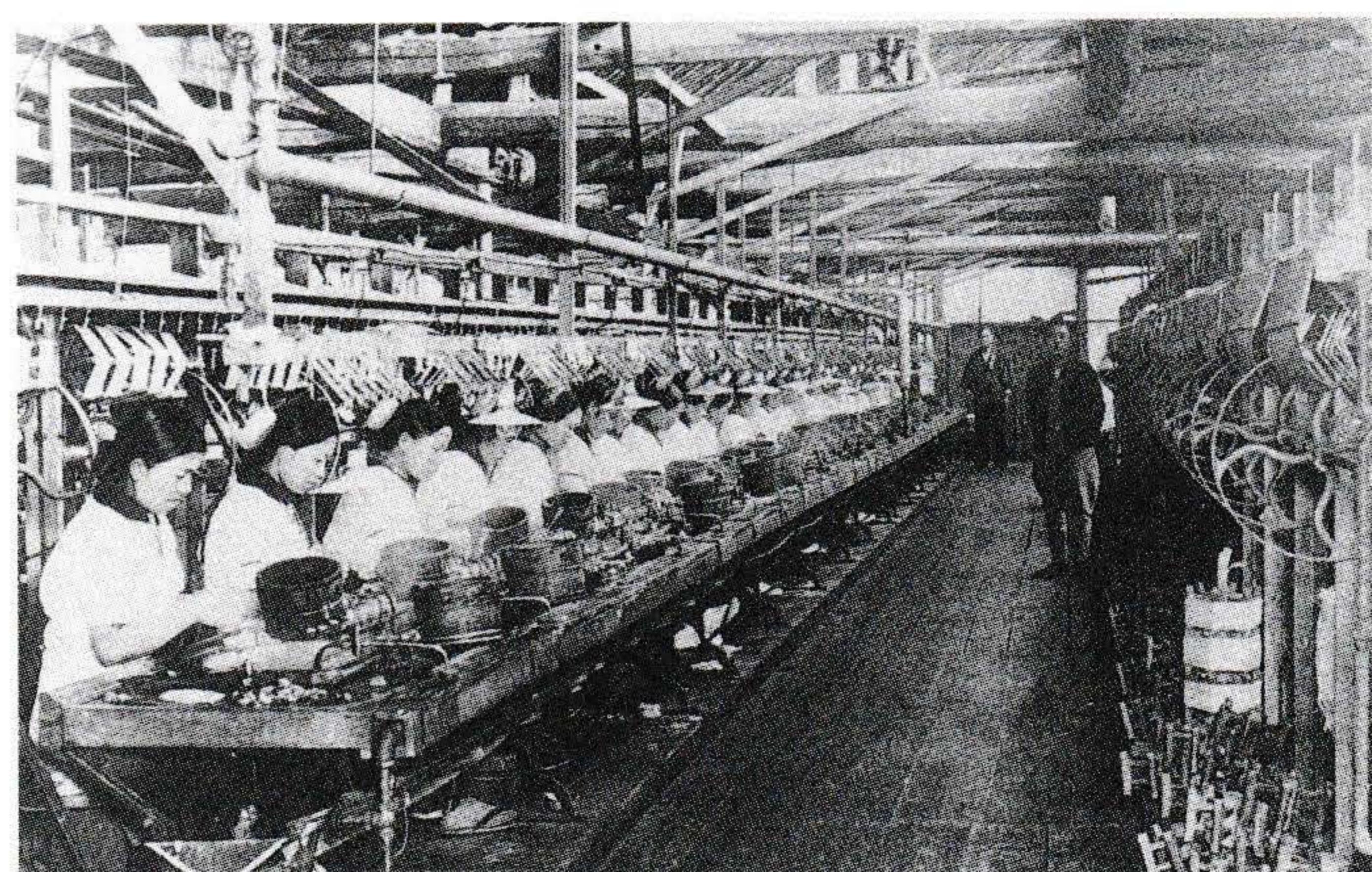
（片桐直夫）



吉川製糸場



共信社全景



共信社操糸工場